

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本の河童神話：その起源と現代日本社会における残存
Author(s)	ヘンリ トラポン マルシアル,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集，1998：21 - 39
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039552
Right	
Relation	



日本の河童神話

—その起源と現代日本社会における残存—

ヘンリ=トラポン・マルシアル

0. はじめに

日本人にとって、妖怪と言えば狐、狸、河童の三つがその代表である。中でも河童という妖怪は非常にポピュラーであり、日本人の河童に寄せる関心はなみなみならぬものがある。今も昔も河童は妖怪のなかの妖怪。いわば国民的妖怪といえる。人々に恐れられたり、愛されたりしている不思議な妖怪だ。

しかし、河童とはどんなものか。一般的な河童のイメージは次のようなものである。身長は4、5歳の子供ぐらい（約1メートル）、鴨のように嘴をもつ。背は亀のように甲羅があり、それ以外のところは鱗で覆われている。特徴としては、頭の上に水を湛えるための皿があって、これが河童の力の源泉となっており、水がなくなると急速に衰える。しかし、そのイメージは江戸時代に作られたもので、その起源はもっと古い。

河童のルーツをめぐって、さまざまな説が伝えられているが、特に有力な説が二つある。その一つは、化生説であって、これにはまた城や社寺の建造のため大工が人形から化生したとする説と、河に捨てた来迎柱などの木屑から化生したとする説との二つの系統がある。もう一つは渡來說であって、河童の一族が中国の黄河上流から海を渡って日本にやってきたとする説である。

これらの説はそれぞれに伝承的真実を有している。従って、どの説も十分に説得力があるのである。

1. 河童の起源

—日本の伝説—

化生説

人形から化生したとする説の根拠は日本各地に伝承されている城や社寺建造にかかわる縁起説にある。

熊本県天草島の伝承によると、左甚五郎（ひだりじんごろう）がさる大名に迎えられてその館の造営に従事したとき、期限までに完成させることがあやぶまれたので、たくさんの藁人形をこしらえて生命を吹き込み、これらに加勢させたので、めでたく館の造営がなった。

その後、不要になったこれら藁人形を川に捨てる際に、今後何を食べたらいいかとたずねるので、甚五郎は「人の尻でも食らえ！」といったので、藁人形は河童となって人の尻子玉を取るようになったという。

木屑から化生したという説もこれと同じで、青森県八戸市の伝承によると、同市の鎮座の櫛引八幡宮の社殿築造に従事した左甚五郎が、八甲田山中から来迎柱として伐りだした樺の木を、尺の測り違いからむだにしまい、ヌキ（貫）を通したまま馬淵川にすててしまった。そこで、木屑は、何とかしてくれと頼んだところ、「その方は尻でも食らえ！」と左甚五郎が怒鳴ったので、かっぱと化生して、人や馬の尻子玉を抜くようになったという。

これらの伝承は生命を得た藁人形や木屑が番匠のつれない仕打ちをうらんで河童に化生し、人や家畜の尻子玉を抜くようになったと説いている。こうした発想は直接的には、人の形をしている河童の形態、また人や馬の尻子玉や肝を好むという性状からきている。尻子玉は人や馬の生命力を体内に封じ込めている栓のようなものであって、これを抜かれてしまうと腑抜けになると考えられている。事実、溺死した人の肛門はみな開いているようで、これは河童に尻子玉を抜かれた明証であるとされてきた。こうした考え方とはべつに、人形や木屑から化生したという発想基盤は民俗信仰に求められる。

まず、藁人形とは「鹿島人形」、あるいは「実盛人形」の名で全国的に知られている。つまり悪霊・疫病の侵入を防いだり、怨霊を封じ込めたり、稲の害虫を追放したりするのに使われている人形のことである。しかし、その信仰は神道のものではなく、仏教、特に寺の建築技術とともに伝えられていたそうである。

渡来説

河童は中国から海を渡ってやってきたという説もある。熊本県八代市の球磨川河口に立つ「河童渡来之碑」に、今から1500～1600年前に黄河の上流から河童が大群をなして、渡来し、この辺りに棲みついた旨の碑文が刻んである。ちなみに、この碑と台座の巨石は「ガラッパ石」といい、350年来の橋石であったものを用いたという。

当地の伝承によると、昔悪戯者のガラッパを土地の人々が捕らえたとき、「この橋石の磨り減るまでは決して悪さを働きません」と誓ったそうである。それゆえに、「ガラッパ石」は水難放除の保障ともなっている。

さて、当地に棲みついた河童族は、その後繁栄して9000匹にもふくれあがった。その族長を九千坊といい、彼が率いる河童族の悪戯がひどくなったので、当時、肥後の殿様であった加藤清正が九州一円の猿を駆り出して、これを攻めたところ、河童一族は降参してこの地を去り、久留米の殿様有馬侯の許しを得て、筑後川へ移り棲んで水天宮のお使いになったという。

九州においては、河童と猿とは実に相性が悪く、犬猿の仲であると信じられている。たとえば、球磨川流域では猿舞師が川を渡る際には必ず猿に目隠しをするという。舟上にある猿は河童を見つけるとすぐに川へ飛び込む。河童は十二時間しか潜ってられないが、

猿は二十四時間も潜っていられるので河童を捕らえて食い殺してしまうそうである。水中の動物たる河童と山中の動物たる猿とはいわば両極に立つ種族であり、そうした異種族間の摩擦がこうした抗争を生じるものと理解されているのであろう。

—河童の呼び名—

日本と中国のミズチ

日本の文献に河童が登場するのは『日本書紀』が初めてであった。これには仁徳天皇の六七年に笠臣(かきのおみ)の祖、県守(あがたもり)が備中川において、毒を吐いて道を行く者を苦しめていた大蛇(みつち)を退治したとある。それから、『今昔物語』集中に水の霊を思わせる怪異説話が一説だけあるが、あとは何世紀にも渡って鳴りを潜め、江戸時代も中期以降となると文献上にはあまり見えなくなる。その中で、一番有名なミズチは須佐之男命によって退治されたヤマタノオロチである。しかし、その大蛇という妖怪は何だろうか。それに、河童とはどういう関係があるのだろうか。

水の妖怪の古い名称が実にこのミツチ(大蛇)であった。『日本書紀』にはこのミツチが鹿の姿に化すともあるので、まさに変化そのものである。チは精霊の意で、ミツチのその本義を漢字で表記すると「水霊」となる。水の霊威の表象として、あるときは蛇となり、あるときは鹿と化するミツチこそ河童の元祖であったのである。

このミツチが訛ったメドチという名が陸奥の語彙として江戸時代の文献に登場している。近現代においてもメトチ・ミンズチなどと発音され伝えられている。

江戸時代の『谷のひびき』に「その形状蛇の如く、長さ一尺六七寸、体偏く頭大きな」と書いてあり、水中において人の体からみつき次第に締め付け水底に引いて行く、とあるから文字通りこれは水蛇であり、その所業たるや河童そのものである。

富山・石川の二県ではガメ・ドチ・ドチロベと呼び、それは鱗形の文様のある甲羅を持つ亀、ないしスッポンのようなもので、腹は赤く、尾がふさふさとしていて、これが千年も経て化けるようになると河童になると信じられている。

その一方で、近現代の辞典には、「その姿は4、5歳の子供ぐらいで鋭い嘴を持ち、総身鱗甲で覆われた水の妖怪で、手足に水かきがあり、頭頂に水をたたえた皿をいただき、これが力の根源をなしているという釈義がある。これは漢籍の水虎の釈義と実に似ている。

ちなみに漢籍には「」の語義として、龍の一種で蛇に似て四足を具えている、とある。「」は「」の同義語で、かのミツチに比定されている。

中国の河伯と日本の河童

河伯とは中国の民話に出て来る妖怪の名前である。中国の神話によると、その河伯は黄河の上流に棲み、体は7歳の子供ぐらいで、鱗に覆われる。背中に甲羅があることもあるという。性格が非常に悪くて、人と家畜(特に牛と馬)を水に引っ張り込むのが好きだそうだ。中国人にとって、この河伯という妖怪は水の残酷さの象徴である。昔は、雨ごいの

ために、中国の皇帝は湖や沼に馬、うし、時には奴隷を河泊への供物として投げすてさせたそうだ。つまり、河泊は単なる残酷な妖怪でなく、水と雨を司る本当の水神である。

日本に渡来してから、その信仰は少し変わって、水虎信仰になった。水虎信仰といえば、特に九州で盛んな信仰である。そのイメージは河泊とそっくりで、悪戯が大好きな妖怪である。鎌倉時代になってから、全国に広がる水神信仰と入り混じり、江戸時代のかっぱのイメージを形作る大きな材料になった。その証拠として、まず河童は水虎（つまり河泊）によく似ていることと今も日本のある地方では河童のことを水虎と呼ぶことなどがあげられる。

—河童の起源—

中国大陸の宗教の影響—中国・朝鮮の龍—

河童は龍の末裔である。龍と同様、水に棲み、頭部に水を湛え、その水を失えば無力となる。陸にあがった河童である。龍は力の源泉である水を含んだ「博山」を持ち、その水を失うと「螻蟻にも裁せられる」のであるが、直海龍が益軒の「大和本草」を増訂した「廣大和本草」には、「頭上に一盆を戴く。水受くこと、三五升、だだ水を得れば、勇猛なるも、水を失えばすなわち猛力の氣無し」とある。

村の娘を娶るかわりに、もともとは雨を恵んでくれた龍にも似て、河童も女性に言い寄ったり、厠（かわや）で女性の尻を撫でたりするといった悪戯をするが、田に水を引いてくれるなど喜ばれることもする。『今昔物語』にも相撲をとる龍が見られたが、河童も一般に相撲が好きだ。金属を嫌うのも龍と同じだ。キュウリは好物であるが、瓢箪は苦手である。肥後天草郡中田村には、河童の頭領が瓢箪を沈めることができずに土地の氏神に降参、それ以降河童はそこに住まなくなり、人々は安心して泳げるようになったという話が伝承されているが、同旨の話は仁徳紀に「大蛇（みつち）」のこととして載っているそうだ。

「蛇の婿入り」という伝説でも蛇は瓢箪を沈めるのに失敗したが、この蛇の婿入りに相当する「河童の婿入り」の伝説もある。もっとよく知られているのは、沼や川の河童が近くに放牧されている馬を水の中に引きこむという「河童駒引き」の伝説である。実際には、「駒引き」に失敗して、託証文を書かされたり、そのさい片腕を引き抜かれて、それを返してもらうために骨つぎ薬などを贈って許してもらうというような話が伝えられている。

これに対応する蛇の話も『今昔物語』に載る。それによると、ある相撲取りが深い淵の岸で大蛇に足に巻きつかれ、水中に引きずり込まれそうになったが、足をふんばると、大蛇の尾がちぎれたという。

河童の性格は、日本の伝説・民話にあらわれる龍・蛇の性格に限りなく近い。形態的にも、甲羅にある鱗にしても、また鋭い爪を持つという手足の指にしても、龍・蛇の痕跡とみることができる。

東北北部では河童はメドチと言い、能登半島ではミズチ、またはミズシと呼んでいた。

これらは『和漢三才図絵』に認められるミズチと同じである。「」をミズチと読んでいたのであって、「龍に似る」と説明しているのである。江戸時代にもミズチは龍の仲間と考えられており、このことも、河童が龍・蛇の類であると見られていた証拠と見ることができよう。しかも、このミズチは仁徳紀の大蛇(みつち)と同根の呼称と考えられる。そして「河童は龍と同じ」という説に力を与えるのは河童駒引きに関する石田英一郎の研究である。石田は柳田国男の日本における「河童駒引き」についての研究を引き継ぎ、その類話が朝鮮半島からヨーロッパの諸地域に存在することを明らかにすることで、「河童駒引き」というのは馬と水中の龍が交って(さんば)、あるいは龍馬、を産むという、ユーラシア大陸各地に分布する伝説の素形であるという結論しているのである。龍が日本ではかっぱとなる。つまり河童は人間化した龍というわけである。

日本の蛇と水神

前述の通り、河童の思想は龍の影響を受けたが、その影響は直接ではなくて、日本の農民に崇められていた蛇信仰を通じて生まれるものである。中国で栄えた龍の信仰は、日本へ渡来したとき、形を変え、蛇の信仰になった。その変化のあったのは、二つの妖怪、つまり龍と蛇は同じ性格をもっているが、農耕民が蛇に求めたのは自然を動かせる呪力だからである。蛇は中国の龍と同じく、雨を恵む動物と考えられていたのである。そのような蛇を原形としながらも、龍は非支配者としての人間に向けられた権力意志の表現、権力のシンボルであり、国家権力と不可分なものだったためである。つまり、龍とは政治化された蛇である。だから、日本の農民にとっては、大陸から伝来し、国家のシンボルであった龍より、自分たちの生活になじんだ蛇のほうが神々しい動物であった。縄文時代と弥生時代の陶器を比べると、日本でももとは水を象徴する動物は龍ではなく、蛇であったということが分かる。貴族にも農民にも使われたいくつかの縄文時代の陶器の外面に蛇の模様がみられるが、弥生時代になると、その蛇の模様は貴族の生活、儀式に使われていた陶器から消え、農民が田畑の周辺に埋めていた銅鐸にしか彫り込まれないようになった。なぜかと言うと、弥生時代、中国と日本との交渉は一段と深くなって、中国と朝鮮半島から来た人たちと共にその文化・思想が日本に来たからである。もちろん、中国大陸の文化に憧れた日本の貴族は水に係る儀式のために、原住民の蛇のイメージより自分たちの地位にふさわしい龍のイメージを採用した。

しかし、蛇信仰は農民の間でずっと伝えられていたのである。この蛇神の性格は複雑である。水のように、人に恵みを与えもするが、損害を与えもする。だから、尊ばれると同時に恐れられている。その両面は蛇を主人公とする伝説、特に「蛇婿入り」という伝説、に見られる。この昔話によると、ある百姓が蛇神と約束をした。田畑の加護の代わりに、娘を嫁にするという約束であった。しかし、娘を蛇神の嫁にせず、蛇神が棲んでいる湖の宮殿へつれてゆく前に鉄の針で蛇神を倒したという。が、時代を経て、その蛇信仰も色々な影響をうけて、変化した。まず、鎌倉時代に流行していた水神信仰の影響があった。水神信仰というものは、昔からあったが、鎌倉時代になって、非常に崇められていた。その

(6)

イメージは5、6歳の子供のようである。慈愛にあふれ、ある地方では水の地蔵菩薩とも呼ばれた。つまり、この水神は水の恵みしか象徴しておらず、信者は水神の好物のキュウリを供える。しかし、水は恵みを与えるだけではないので、九州から来た水虎信仰の影響も受けた。

この水虎とは中国からきた信仰で、もともとは河泊と同じ妖怪であった。水神のように、丈は5、6歳の子供で、水霊の特徴である鱗に覆われた体をもつ。ある地方では甲羅も持つ。しかし、水神とは全然ちがいで、その性格は最悪で、好きなことは棲んでいる水の中に人や馬を引っ張り込むことである。つまり、水神が水の恵みの象徴だとすれば、水虎は水の災害の象徴である。しかし、その様々な信仰が同じ物（水そのもの）を祭ったので、段々混合されて、その結果、江戸時代の河童が生まれた。江戸時代の河童は、蛇神のように鉄で作ったものが嫌いだし、「蛇婿入れ」とそっくりの「河童の婿入れ」という伝説もある。また、水神のように、キュウリが好きだし、たまには田植えの手伝いもする。水虎、また河泊のように人や馬を水中に引っ張り込むのが好きである。

2. 日本の河童たち

山童（やまろ）

河童は川に千年、山に千年棲むという説がある。九州では春から夏には川に棲み、秋から冬にかけて山に移ると考えられている。山にいるときには山童、あるいはセコ、セセコなどと呼ばれ、一般に春の彼岸に山に戻るといふ。前述の通り、河童が水神的な性格を持っているように、山童は山神的な性格を持ち、体の特徴なども川に棲んでいる時とは変わるので、時々河童とは区別される。

いつもは山の奥に棲んでいて、背丈は1mくらい、人間の10歳くらいの子供にみえる。全身に黒か茶色の細かい毛が生えた姿は猿のようでもあり、胴は短く、脚がひょろっと長く、人語を話す。相撲が大好きなのは河童と同じで、集団で相手をさせてくたくたに疲れさせたりする。また、山の樵が木を伐ったり運んだりするのを手伝い、けっこう喜ばれたりしている。

山の稜線が河童の通り道なので、そこに作業小屋などを建てて邪魔になることがないように気をつけていれば、むこうから人間に害は決してなさない。しかし、人間が殺そうと考えたりすると素早くそれを察知。逆に、祟りを加え、発狂させたり、高熱を出させて殺すこともある。あるいは家に火をつけるなど災いをなす。

また、熊本県では春の彼岸になると、山童が何千匹も集団で、家の屋根伝いに川へ下がってくるそうである。その移動する姿を見ると病気になったりするので、絶対見ないように注意しなければならない。

もともと山童は山で働く人たちの間では山の神、またはその使いと信じられていたが、

次第に信仰が廃れ、妖怪になってしまったようである。実際、地域によっては山の神のなかでも一番位の低いものと考えられている。つまらない悪さもするようになる。だから、九州地方では山の怪異現象の天狗倒しなども、山童の悪戯と考えられている。

山童は長崎県、宮崎県などではヒョウスベと呼ばれている。これは鳴き声からきているようである。ヒョウスベが春と秋の彼岸に山と川を行き来する時は、必ず雨模様と決まっている。移動する時には、山の尾根筋や溪流沿いをヒョー、ヒョーと鳴きながら集団で空を飛んでいくのだという。そのときのヒョウスベの姿は、黒い鳥にも見えるようだ。

河童が川と山を往来する例は和歌山県にもある。川にいるときはオンガラボーシ、ゴランボなどと呼ばれる河童で、山に入るとカシャンボという名に変わって山童になると言われる。その姿は6、7歳の子供の姿をしていて、馬を山に隠したり、牛小屋に入り込んで涎を塗りつけて牛を病気にしたり、老人の耳元でいきなり大きな声を出して、耳を聞こえなくさせたりするといった悪質な悪戯をするということだ。

ガラツパ

ガラツパは川や磯に棲んでいてイソッコの名もある。頭に皿があり、体が細くて手足が長く、座ると膝頭が頭より高くなるようだ。性格的には、河童と山童の両方の要素を持つ妖怪で、ガワツパ、ガウル、カラルとも呼ばれ、鹿児島県から南の島、奄美大島などの諸島に棲んでいる。

石川純一郎の『河童の世界』によれば、吐伽刺列島十島村悪石島では、カラツパと仲良くなり、仲間だと思われるようになると魚がよく釣れるという。仲間となった人が釣りに行って釣り糸を垂らすとガラツパが水中で魚がよく食いつく自分の釣り糸に替えてくれるのである。ガラツパも春の彼岸に川に入り、秋の彼岸に山に入るそうである。山で突然怪しい音を聞いてびっくりさせられたり、道に迷ったり、急に腹が痛み出すという異変は、みんなガラツパがやっているのだ。

素足のときにガラツパの悪口をいうと、どんな遠くにいてもガラツパが聞きつけ、必ず仕返しをする。地面の水脈を通じて悪意の信号が伝わるのかどうかよくわからないが、とにかくあまり怒らせると憑かれてひどい目に遭わされる。

また、ある漁師が海岸で火を起こしていると、ガラツパがそばに来た。そのガラツパは口から涎をたらしっぱなしで、それがものすごく臭かった。そのため、漁師は翌日から寝込んでしまったという。相当に強烈な毒気も発しているようである。

猿候

猿に似た姿をした河童は、エンコー、エンコなどともいわれ、岡山、広島、山口、島根、高知などの諸県に棲んでいる。一般に顔や手足は猿のような形で、体はなまずのようにぬるぬるした感じだとされている。性格はだいたいほかの河童と同様だが、猿候は人に化け

るのが特徴である。

広島市内には猿候川があり、猿候橋という橋がかかっているが、昔、この川に棲む猿候が人間をたぶらかそうとした話がある。ある男が橋の上で涼んでいると、髪のない老婆が話しかけてきた。川を見ながらしばらく世間話をして、男が老婆のほうを見ると、いつの間にか若返って髪が黒くなっていた。またしばらくすると今度は若い娘に変わっており、男に色っぽく迫ってきた。ちょうどそのとき「猿候だ!」と叫ぶ人があり、それを聞いた女はあわてて川に飛び込んで消えたという。この話からすると、エンコーは女性に化けて人間をたぶらかしたりもするようで、最後には川に引きずり込んで大事な尻子玉を抜くのが目的のようである。

高知県に棲む猿候の仲間にシバテンがいる。芝天狗ともいわれるこの怪獣は身長が1mくらいで、川の堤などに出現しては、人間に相撲を挑んだりする。力自慢で人間の大人に負けないくらい強いそうだが、気をつけないと化かされて一晩中一人で相撲をとらされることがある。

実は、このシバテンはもともと山の中に棲んでいたらしいのだが、旧暦6月12日を境に川に入って猿候になるといわれている。民俗学者の石川純一郎は「河童の世界」の中で、「シバテンは天狗的な存在から、人の好みに応じて次第に河童に近づいて来たに違いない」と述べているが、その本性は山童に近いものようである。

本来、山に棲む猿に似た姿をしている河童というのは、山の神と何らかの関係があるということであろう。そのほか、同じように猿に似た河童としては、淵猿（広島、岩手）、川猿（静岡）、カワエロ（岐阜）、テナガ（島根）、テガワラ（富山）などがいる。また岐阜県のカワエロは猿に化けるそうである。

ミンツチ

ミンツチは北海道の湖沼や川に棲む半人半獣の霊的な存在で、河童と同類と考えられている。この河童の名前の「チ」は水や山野の精霊を意味し、アイヌのミンツチ・カムイもそうした精霊が獣身に化生したものといえる。背格好は人間の子供くらいで、頭髪があつて皿はない。肌は紫か赤っぽい色をしていて、足の形は鳥に似ているか鎌の形をしている。

ミンツチは魚族を支配する神といわれ、石狩地方では魚をたくさん捕らせてくれた。その代わりに、毎年必ず何人かを捕る（殺す）ので、人々は日高の静内の方へ移って欲しいと頼んだ。すると水死するものはなくなったが、魚も捕れなくなった。また、ミンツチが若者に化けて若い娘のいる家に婿入りし、その家に狐運や幸せをもたらすという話もある。ただし、怒らせるとその地域一帯の食料の霊と一緒にさらって行ってしまうという恐ろしい面も持っている。

アイヌの伝説によると、ミンツチはヨモギの神が獣身の姿をとったものだという。ヨモギは端午の節句に菖蒲と一緒に軒先に差す風習があるように、邪気を払う呪力を持つ植物

である。江戸時代、アイヌと交易する日本人の船で疱瘡神がやってきたとき、これを避ける呪法として草を十字に結んだ草人形を作って魂を込め、水祭で疱瘡神と闘わせた。奮戦の末、見事打ち負かしたが、そのとき戦死した草人形が水の中でミンツチになったのだという。河童の人形起源説とよく似ている。

水虎

水虎はもともと中国の湖北省の河に棲む妖獣である。「本草綱目」によると、3、4歳の小児の姿で、矢を射ても突き刺さらないような固い鱗のような甲羅を持っている。秋になると、浅瀬に出てきて姿をみせるが、その顔は虎に似ているので、水虎とよばれている。性質はおだやかだが、子供が悪戯をしようとするすると噛みついたりする。こうみると、水虎像は河童によく似ている。そのため、江戸時代の頃に河童と混同されて、その名が使われるようになったと考えられる。

というわけで、日本の水虎は、川の中に棲む河童によく似た妖怪である。性格的には河童よりもかなり恐ろしいこともするようで、単に人を水に引きずり込むだけでなく、生血を吸って、魂まで食らい、生仏できなくすると言われる。

この水虎という妖怪は長崎県や青森県に棲んでおり、河童と混同されている場合が多いようである。特に青森県津軽地方の岩木川流域では、現在、水虎様（シッコサマ）と呼ばれて、神様として祭られている。子供を水難から守る神様ということだが、そもそもは子供ばかりねらって水に引き込んで殺す恐ろしい存在だった。そのため、人々は何とかそんなことはやめて欲しいと願い、神様に祭り上げてご機嫌を取り、守護神になってもらっている、というのが本当のところである。そのシッコサマの形は、青森県に棲む河童のメドチとほぼ似たようなもので、頭に皿はなく、おかつぱの髪をし、顔が真っ赤で、一見子猿のような姿をしている。

シッコサマは、子供をわざわざ迎えに来たりする。だから、これを防ぐためにはまず潮来に口寄せをしてもらって、どこの子を取るつもりなのか、御告げを聞く。子供がねらわれたと告げられている家では、藁人形を作って子供の着物を着せ、御神酒やキュウリなどの野菜を供えて川に流すというようなことをしなければならない。そうすると、以後、子供を迎えられることもなく無事に成長できるとされている。

ケンモン

ケンモンとは「化の物」「怪の物」が訛った呼び名で、特体の知れない霊的な存在を意味し、奄美諸島などに棲む妖怪である。童形で、洪水の時に人を川に引き込んだり、子供の尻を抜いたりする行為や魚を捕るのがうまいというあたりは、かつぱと非常に似ている。ただし、全然違った特性も持っている。陸にあがった時には、必ずカジユマル（沖縄など亜熱帯に生える常緑樹）の木に棲む。これは木の精霊的な特質といえるから、一般に河童

とは別種のものと考えられている。

奄美のケンモンは漁が好きで、夜になると、頭の上の皿で油を燃やしたり、指の先に火を灯して岩の間を歩いて魚を捕ったりする。人間が漁をしていると、岩陰でばったり鉢合わせしたりすることもあり、そんなときのケンモンの姿は、5、6歳の子供の背丈で、全身に毛が生えていて猿に見える。髪型はおかっぱ頭で、口から臭い涎をたらし、それには燐（鬼火）が混じっていて青く光っているという。

魚や貝を食糧とし、特に、魚の目をやたら欲しがると。たとえば、漁師が魚を捕りに行くと思議なほど魚が捕れたが、どれもみんな目を抜かれていたという。また、一番嫌いなものはタコとギブ（貝の一種）だという。どちらも絡みついて腕を引き抜かれたことがあるかららしい。だから、ケンモンが近づいてきたら「ヤツデウマル（たこ）を捕ってきて投げるぞ」といえばたちまち逃げてしまう。

ケンモンは初め海に棲んでいたが、どうにも嫌いなタコを避けて陸にあがり、ガジュマルの木に棲むようになった。陸にいるときはカタツムリを常食としていて、ナメクジなども丸め餅（ダンゴのようなもの）だと言って食うそうである。もちろん、魚介も食うから、ケンモンの棲むカジュマルの木のそばには、いつも貝殻がいっぱいあるといわれている。こうみるとケンモンは水の精霊でもあり、木の精霊でもあるようだ。

化けるのも得意で、相手を見てそっくりの姿になるかと思えば、周囲の物や植物などに化けて姿をくらませることも自由自在。だから、ある地域では、ケンモンが子馬の姿に見えたりすることもある。相撲を好むのは本土の河童と同じで、「相撲を取れ」と挑まれたときは、逆立ちして見せると、真似をして皿から水がこぼれ、力が抜けてすぐに退散するというのも一緒だ。さらに、片方の手を引くともう一方の手もつながってスルリと抜ける点も共通している。この点は九州の河童が進出してきて、影響を与えたせいではないかと考えられている。

一般にケンモンはあまり人に害を与えない妖怪と考えられているが、それでもその仲間のうちには性格が荒く、悪戯を好んだり、悪口を言われていると人に祟ったり、命を取ったりする者もいる。ケンモンの先祖については、河童と同じような藁人形説、あるいはジャワ島渡來說などがある。

3. 現代の河童

河童の変化

『日本書記』のころから古代の物の怪は人間の恐怖心をかき立て、物の怪はクローズアップされていた。河童に関しても『水虎考略』などでは不気味な姿で登場している。だからこそ、河童に関わると縁起が悪いとか、生命に関わるという迷信や伝承が、未だに残存している。中国伝来の水虎や河伯などの絵の影響はあまりにも強烈で、日本の河童に対する

イメージも、どこまでも人々の恐怖心をあおりたてるようである。河童の考空が進んだ江戸時代になってからも、河童は魑魅魍魎が跋こする闇の世界に棲む存在として恐れられつつあった。しかし、明治・昭和になってから、そのイメージに変革をもたらした画家たちがいる。

一人目は小川芋銭と名乗る画家である。伝統的な描写法を受け継ぎながら、彼は妖怪の世界から一歩抜け出した独特の画風を作り出した。その変革の起源は芋銭の性格そのものによる。出世したがる江戸時代の学者・画家と違い、芋銭は無欲恬淡とした性格の持ち主であった。芋銭の本名は小川茂吉であったが、得意の絵画で大好きな里芋が食べられるような銭を稼ぎたいので、芋銭と号したそうである。この性格も自然への愛も彼の絵から感じられる。

二人目の変革者は清水コンという漫画家であった。彼は河童の碑（1951年に芋銭の遺徳を顕彰するために建立された建造物）を見て、また芥川龍之介と火野葦平の『かっぱ』を読んで、想像以上のカルチャーショックを受けた。その後、彼の『かっぱ川太郎』や『かっぱ天国』などの作品で描かれた河童のイメージは非常にモダンになった。コンの描く河童はサラリーマン家庭の投影であり、生き生きと暮らす庶民の姿そのものであった上に、女性の河童が非常に多いので、伝統的な一つのシンボルから女性進出の時代をシンボル化しているとも言える。でも、芋銭の作品にも清水の作品にも通じるものがある。昔、妖怪として恐れられていた河童のイメージは一般に怖いものだが、近代現代の変革の影響を受けて、人間社会の隠喩と考えられ、そのイメージは一段とかわいくなった。

環境のシンボル

この二人の「河童イメージの変革者」は美術や芸術の世界に属しているが、河童に取り組むのはそのような世界に限らない。文芸の世界では、泉鏡花、芥川龍之介、中河与一をはじめ多くの作家が言及し、学問の世界では柳田国男、折口信夫、石田英一郎などから現在に及び、「河童文化」についての次々と研究、調査が進んでいる。さらに民俗学、民族学から文化人類学へと学際的な飛躍が望まれている。比較文化学の立場からはますます国際的な河童文化の研究が盛んになってきている。これからは歴史学や考古学、さらには生物学などあらゆる学問分野からの研究や発見が行われて、人間社会に寄与、貢献できることになる。

近年、水辺環境の急激な変化、開発、水質の悪化など、多くの者にとって大変な時代になった。共存共生の地球環境を、復元する原動力として、かっぱはその存在感を強めていかなければならないだろう。

河童連邦共和国

「河童連邦共和国」というのは昭和六十三年（1988）に設立された組織の名前である。

その目的は「平等・博愛・ロマンとユーモアのもと、明るい、楽しい環境をつくり、かっぱを通じて国民相互の親を計るとともに、かっぱに関する情報交換などにより友好の輪を広げる」というものである。そのために、毎年夏、全国規模の「河童サミット」を開き、国民相互の親睦を計り、河童文化発展にすぐれた功績をあげた人に文化勲章を授与する。また、年六回「かっぱ新聞」を発行するなど多彩な活動を展開している。

河童連邦共和国のもう一つの重要な活動は、河童を再び呼び戻すための環境「きれいな水、豊かな緑、澄んだ空」を守っていくことである。その意志をあらわすために、河童連邦共和国は「水は命・かっぱは心」のスローガンを掲げている。

現在、河童連邦共和国内には、河童の故郷づくり（河童を介した交流の拠点をつくり友好の輪を広げるとともに、河童文化の継承・発展に尽くす）を進めている多くの「かっぱ村」がある。日本列島の北から地方ごとに列挙してみよう。

北海道（旭川）旭川かっぱ村	中部（福井）越前かっぱ村
関東（茨城）牛久かっぱ村	（岐阜）奥飛かっぱ村
（群馬）新治かっぱ村	（岐阜）みのかっぱ村
（埼玉）川越かっぱ村	（岐阜）藤橋かっぱ村
（東京）浅草かっぱ村	（静岡）熱海かっぱ村
（東京）上野かっぱ村	（静岡）静岡かっぱ村
（広域）利根川かっぱ村	近畿（大阪）堺かっぱ村
甲信越（長野）駒ヶ根天竜かっぱ村	（兵庫）明石かっぱ村

また、「～村」と称せずに「共和国」あるいは「王国」として独自の地域活動を行っている団体・グループに、九州・熊本県八代市の「河童共和国」、鹿児島県川内市の「川内がらっぱ王国」がある。

4. おわりに

日本人にとって河童という妖怪は日本文化の欠くべからざる部分となっている。ある人は、河童は水神の零落したもので、それゆえ、自然、且つ水と日本人との親近性を反映すると言っている。しかし、それは半ば誤解だろう。実際、河童が自然と生態学の一つの象徴になったのはここ十数年前のことである。かっぱ思想がこれほど日本文化の一部となっているのは、日本社会と同じ影響を受けてきたからである。中国大陸から渡来した思想は（河童渡来伝説、または様々な呼び名を見て、確かめられる）段々農民の間で広がり、原

住民の水の蛇信仰と水神信仰に取り入れられていった。

明治時代まで、農民にとっては河童は水の両面を象徴していた。水のように、河童は人間に恵みを与えもするが（田植えの手伝いする伝説もある）、悪戯をしたりもする（洪水を起こす、人畜を溺れさせる）。しかし、明治時代になると、そのイメージに変化が見られる。初めてその変化を起こしたのは画家の芋銭と漫画家のコンであった。彼らに描かれた人間的な河童が平和・調和の世界に棲んでいるという新しいイメージのほうが日本の新しい社会にはよりふさわしい。芥川龍之介、水木茂などの芸術家の作品のおかげで、そういうイメージは強くなったが、70年代後半、人間によって破壊されつつある自然と生態学の一つの象徴になった。つまり、長い間妖怪として恐れられていた河童は人に希望を与えるものになったのである。

参考文献

『日本の民族』、武田明著、第一法規出版株式会社、東京、昭和17。

『龍の起源』、荒川宏、紀伊国書店、東京。

『河童の系譜』、安藤操と清野文男、五月書房、東京、1993。

『遠野の河童たち』、原美穂子、風琳堂、名古屋、1992。

『河童考』、飯田道夫、人文書院、東京、1993。

『日本のかつば-水と神のフォークロー-』、河童連邦共和国（監修）、桐原書店、1991。

『河童駒引考』、石田英一郎著、岩波書店、東京、1994。

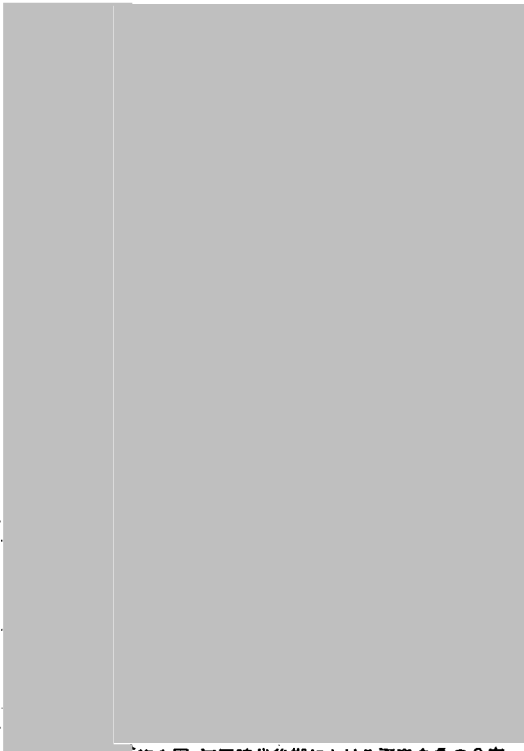
『妖怪・怪物』、荒雅雄、平凡社、東京、1989。

『河童』、大島建彦編、岩崎美術社、東京、1988。

『河童の日本史』、中村著、日本エヂターズスクール出版部、東京、1996。

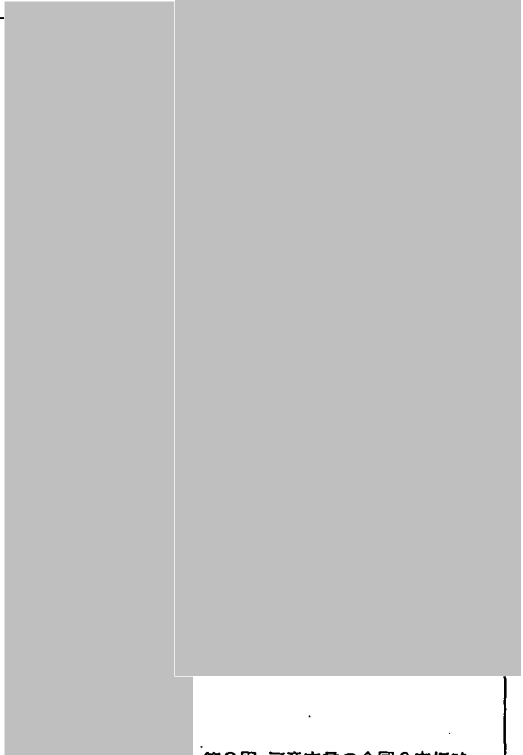
『神話伝書辞典』、東京堂、東京、1963。

『神々と妖怪たち』、中沢新一、平凡社、東京、1990。



第1図 江戸時代後期における河童名乗の分布

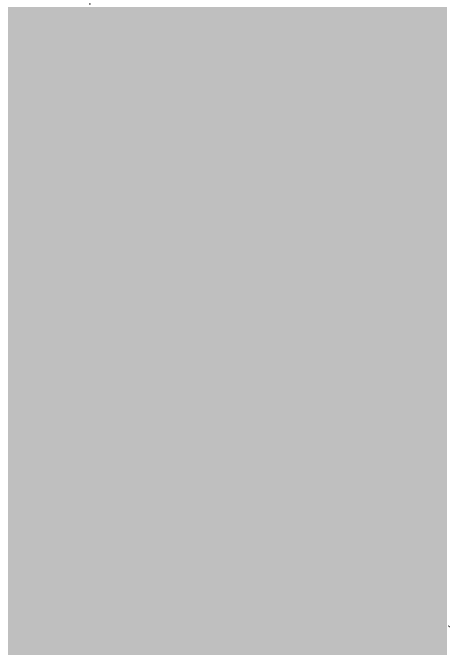
石川邦一郎『妖怪 河童の世界』(河童研究会)より



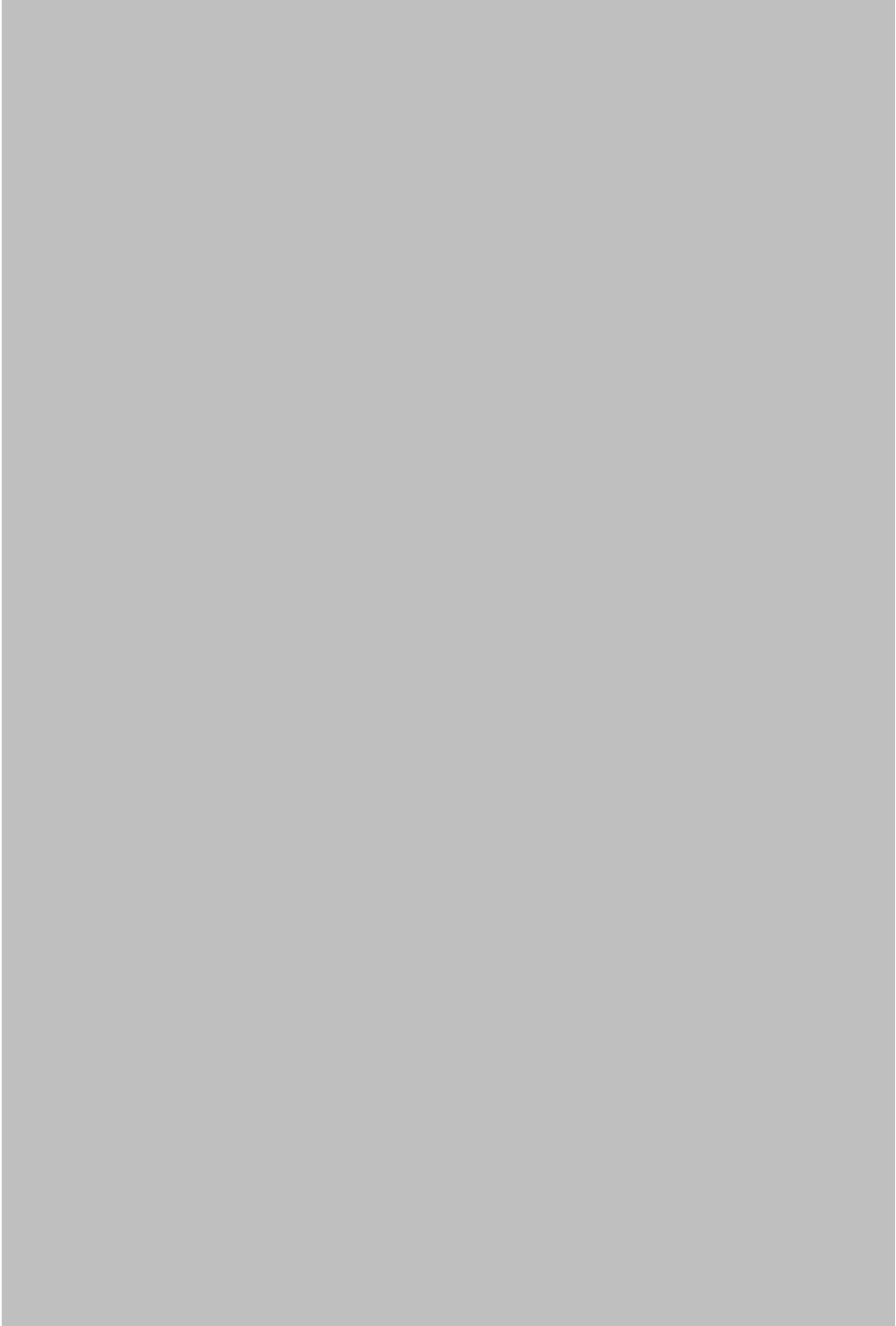
第2図 河童方言の全国分布概略



『妖怪・怪物』、平凡社より



『妖怪・怪物』、平凡社より



^B 日本のかっぱ - 木と神のみ - クロア。、桐原書店より



図18 『西光知事』の刊行図

図17 高木哲山『本町歴史』

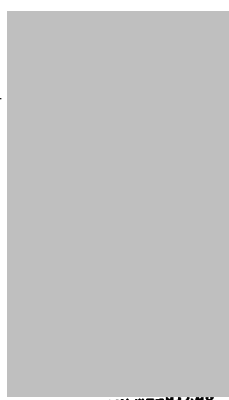


図16 『中孚夜話』京都で編まれた刊行

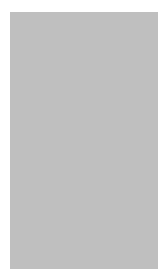


図14 『江表』の刊行図



図15 『船坂』の刊行

32 5 編かれた刊行

『河童の日本史』、日オエヂターズスクール出版部より

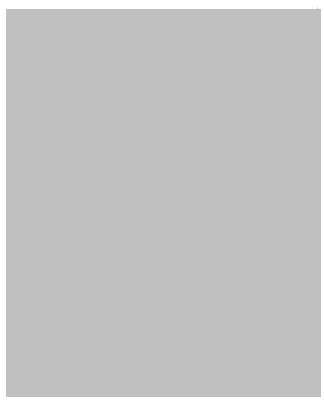


図19 高木哲山『本町歴史』水説

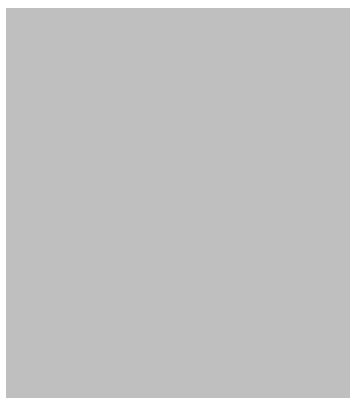


図20 『東海道風見』刊行

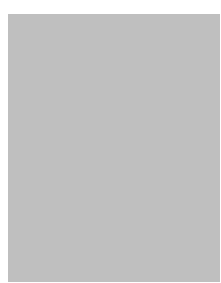


図12 (右) 高木哲山『本町歴史』の水説



図13 (上) 『河童川歴史』の本町コノ巻

『河童の日本史』、日オエヂターズスクール出版社より

図3 「和蘭三才図会」の川太郎図

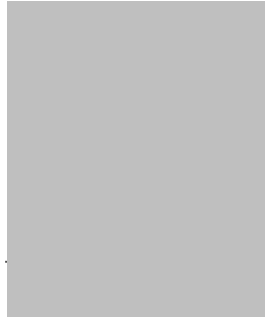


図4 「日本山崎名物図誌」の河太郎

『河童の日本史』、日オエヂタースクール出版部より

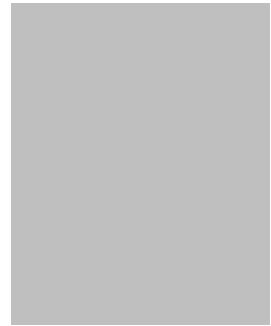


図21 高木杏山「本草綱目」沢の穴三つの河童

『河童の日本史』、日オエヂタースクール出版部より



小川孝経「水戸川のカッパ」三城書店近代美術部



小川孝経「河童図」(河童の日本史)三城書店近代美術部



『日本のカッパ -水と神のメークロア-』、桐原書店より



¹⁰ 日オのガッハ° -本と神のミークロア-、桐原書店より



『日オのから』 - 本と神のフォークローア - 』、桐原書店より